

のと 小学生とつながる スポーツ交流イベント

16班

要旨

令和6年能登半島地震により、奥能登地方では児童の遊び場や運動機会が制限され、精神的ストレスや体力低下の課題が考えられる。先行研究では震災後の運動遊びによる心理的ケアの有効性が示されている。本研究は、七尾市の小学生を対象に高校生主体のスポーツ交流イベントを企画・実施し、その有効性を検証した。結果、児童らは主体的に作戦を立て、励まし合いながら競技を楽しみ、運動機会の創出とコミュニケーションの育成が達成された。高校生が安心感を提供したことで児童のストレス緩和や運動意欲向上に繋がった。一方で、運営側の多忙による高校生と児童の対話不足や、初期のアイスブレイク不足が課題として浮き彫りとなった。今後は、事前準備の徹底と運営の円滑化を図り、発達段階に応じたプログラムを継続することで、持続的な心理的支援と地域活性化に貢献していく。

1.研究背景と目的

2026年1月1日に発生した「令和6年能登半島地震」はインフラの損壊に留まらず、地域住民、特に子どもたちに多くの影響を与えた。震災以降、奥能登地方においては、多くの公園や学校体育館、地域のスポーツ少年団の活動拠点が被災し、完全な復旧には至っていない。これにより、児童が安全にかつ思いきり体を動かせる「遊び場」が制限されていると考えられる。

セーブ・ザ・チルドレンによる小学4年生から高校生を対象とした「2024年能登半島地震子どもアンケート」では、「生活の変化によりストレスを感じた」「避難所生活で遊び場がなく楽しい気持ちになれない」といった切実な声が寄せられた。本探求の対象地域である石川県七尾市には現在2,104人の小学生が存在しており、これら多くの子どもたちが日常的な運動機会や遊び場を奪われ、心理社会的なケアが必要な状況にあると考えられる。

一方で、自然災害後における子どものメンタルケアについて、2019年、佐藤善人氏による熊本県の震災後の調査では、体育授業においてスキップと交流を伴う運動遊びを試行したところ、児童の不安感が有意に低下したことを証明している。

本論文では、以上の背景を踏まえ、能登半島地震によって心理的ストレスを抱える七尾市の小学生を対象に、高校生が主体となる「のと小学生とつながるスポーツ交流イベント」を企画・実施し、スポーツを通じた子どもの心理社会的ケアの有効性を検証することを目的とする。

2.調査・分析

具体的には、ただスポーツをするのではなく、能登半島地震を経験した地域の児童を対象に、スポーツと交流を通じて以下の5つの目的を達成するための企画とする。

【① ストレスの緩和】

震災による生活環境の変化や精神的ストレスを、思い切り体を動かすことで発散・軽減させる。

【② 運動機会の創出】

地域の遊び場が制限される中で、小学校の施設内で安全に運動できる機会を増やす。

【③ 運動意欲の向上】

憧れとなる高校生と関わることで、「運動がしたい」「上手になりたい」という前向きな意欲を引き出す。

【④ 楽しむこと】

何よりも子どもたちが心から笑い、楽しめる時間を提供し、地域の活気を取り戻す。

【⑤ 協調性とコミュニケーションの育成】

高校生とのコミュニケーションスキルを養うとともに、チームプレイを通じて仲間と協力し合う力を育てる。

これらの達成を目的として小丸山小学校の6年生の生徒59人とその教師16人それぞれに震災後の生活や運動の状況についてのアンケートを行った。生徒へのアンケートでは、地震の後、外や体育館で遊ぶ時間が減ったと28.8%が回答した。(図1)さらに、広い体育館で、高校生と一緒にスポーツをして遊ぶイベントがあったら参加してみたいかという問いには、ぜひ参加したい、または内容によっては参加したいと答えた生徒は91.6%だった(図2)。

教師へのアンケートでは、震災が起こる前と比較して、児童の「基礎体力」にどのような変化を感じるかという問いに著しく低下している、やや低下していると答えた人の割合が68.8%となった(図3)。さらに、スポーツなどの集団活動において、児童の中にはストレスによる感情の起伏(喧嘩など)が増えたり、以前よりルールを守るのが

難しくなっている子が増えているという意見が得られた。学校内での「運動時間」を確保する上で、現在障壁となっていることはあるかという問いには、行事の過密化による時間の不足、児童の安全管理上の制約が挙げられた。さらに、今回の交流イベントで、特に重点を置いてほしい要素として、楽しさを重視したレクリエーション（おにごっこ等、高校生との対話や交流（憧れ・安心感）、大人数で思い切り体を動かす場づくりが必要だという回答が得られた。

3. 地震のあと、外や体育館で遊ぶ時間はどうなりましたか？
59 件の回答



図1 遊び時間の変化

5. 広い体育館で、高校生と一緒にスポーツをし...イベントがあったら、参加してみたいですか？
59 件の回答

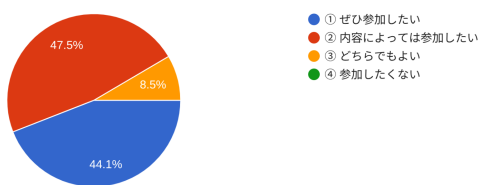


図2 イベントの参加希望

問1 震災が起こる前と比較して、児童の「基礎体力」にどのような変化を感じますか。
16 件の回答

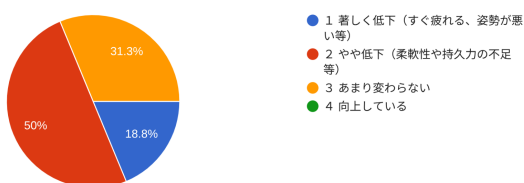


図3 基礎体力の変化

3.解決に向けた提案と実践

調査で明らかになった運動機会の減少や震災後のストレスの増加といった問題を解決し、運動機会の創出と児童間や普段会わない他者とのコミュニケーションの増加を目指すため、私達は小丸山小学校6年生との運動交流会を企画し、ゲームを2つ行った。

1つ目はミッションリレーである。このゲームでは小学生を「バランス」「コントロール」「スピード」に分けて各役割での指示を1番早く完遂できたら1位というルールである。

2つ目はじゃんけんリレーである。このゲームではリレーのルートの途中にいる高校生とじゃんけんをし、勝ったらそのまま走れるが、あいこや負けの場合は勝つまで足止めになるというルールである。

この交流会では小学生たちは他の生徒と協力しあい、競技について自主的に考え、楽しく行っている様子が見受けられ、目的としていた運動機会の創出と児童間でのコミュニケーションは達成できた。

しかし、高校生は企画の進行などの運営などに回ったり、小学生と話す時間を取れていなかったりもあって普段会わない他者とのコミュニケーションを増やす目的が十分に達成できたとは言い難く、限られた時間の中で私達がどうコミュニケーションを取っていくかを考えることが課題となった。

4.考察

事後アンケートにおいて、ほとんどの児童が協力できたと回答しており、活動を通じて高い協調性が育まれたことが窺える。具体的な姿として、ミッションリレーでは「バランスが得意な人」「ボールを投げる人」など、互いの個性を認め合い、適材適所の役割分担を行う姿が見られた。

また、じゃんけんリレーでは、走り終えた仲間から相手の情報を聞き、次の作戦をチーム全員で予想し合うといった、主体的なコミュニケーションの連鎖が生まれていた。競技をするなかで、ミスを責めずに、励まし合い、お互いを称え合うポジティブな空気感が生み出された。

このことから、高校生が児童の行動や態度に対して、終始温かく対応してくれたため、

安心して活動できていたといった先生からの回答があったように、高校生が安心できる場を提供することで、児童は自主的に仲間を思いやり、協力し合う高い社会性を発揮できることが実証された。

一方で、緊張を理由に話せなかった児童がいたことは、競技開始前のアイスブレイクが不足していたことを示している。最初の段階で、児童からも自己紹介をするといった双方のコミュニケーションの時間を数分でも設けていれば、児童の緊張を早期に解きほぐすことができたと考えた。

総合的に判断すると、高校生に頼れる環境そのものが、児童にとって大きなリフレッシュにつながった。

5.今後の課題と展望

今回のスポーツ交流イベントでは、多くの小学生に楽しんでもらい、運動機会の創出や児童同士の協力を促すという目的を達成することができた。一方で、一人ひとりの体力や運動経験に応じた活動内容の工夫や、全員が主体的に参加できる環境づくりには改善の余地があることが分かった。また、高校生が運営に回る場面が多く、小学生と十分にコミュニケーションを取る時間を確保できなかったことや、競技前の自己紹介やアイスブレイクが不足していたことも課題として明らかになった。

今後は、事前のシミュレーションや役割分担をより綿密に行うことで運営を円滑にし、高校生と小学生が交流できる時間を十分に確保したい。また、児童の発達段階や運動能力に応じたプログラムを取り入れることで、誰もが安心して参加し、楽しめる交流イベントを目指していきたい。さらに、今回実施したアンケートで得られた意見や改善点を今後の企画に反映し、スポーツを通じた交流活動を継続することで、子どもたちの運動意欲の向上や心理的な支援、地域の活性化につなげていきたい。そして、この活動で得た経験を生かし、企画力や運営力、コミュニケー

ション能力をさらに高めながら、地域に貢献できる継続的な活動へ発展させていきたい。

6.結論

この活動を通して、被災し不安感を抱いている小学生とのスポーツ交流は、ストレスの緩和や運動・遊びの機会の提供、児童の運動意欲向上において極めて有効であることが明らかになった。

高校生との交流は、普段は気が張っている高学年児童に対して安心感をもたらただけでなく、児童同士が主体的に競技に取り組み、児童間で作戦を話し合い、競技を純粋に楽しみ、運動意欲の向上へつながるきっかけを作ることができた。

一方で、説明や自己紹介といった競技開始前の交流が不十分、時間配分や騒がしい状態の統制といった、運営における課題も明らかとなった。したがって、このような活動をより効果的に行うためには、事前シミュレーションの徹底と運営計画の細分化が不可欠である。

7.参考文献・協力団体

<参考>

佐藤善人氏による

自然災害後の体育授業における心理社会面の強化を意図した運動遊びプログラムの開発

<Webサイト>

セーブ・ザ・チルドレンによる

「2024年能登半島地震子どもアンケート」

<https://www.savechildren.or.jp/news/publications/download/fullreport-notochildrenvoice2024.pdf>

<協力>

七尾市立小丸山小学校